# 日本の風物、春の桜と黄金に輝く秋の稲穂

特集 新米

ゆうきひろき

文：梶原圭三
写真：川上和禎

日本人としてのアイデンティティーを感じる風景は「春の桜か秋の稲穂」と言ったら言い過ぎだろうか。しかし、毎年この景色を眺めるに、それほど言い過ぎでもないのでは？と感じるのは私だけではないはず。

今から遡ること90年前の昭和3年11月10日。昭和天皇即位の礼が執り行われ、その4日後の11月14日から15日にかけ大嘗祭（だいじょうさい）が執り行われた。大嘗祭とは、天皇が即位の礼の後、初めて行う新嘗祭（にいなめさい）の事である。ちなみに新嘗祭とは、稲の収穫を祝い、翌年の豊穣を祈願する古くからの宮中祭儀であり、天皇が新穀を天神、地祇にすすめ、その恩恵を謝し、また自らも食する。明治以降は毎年11月23日に行われている。

その、昭和天皇即位の礼に際し、大嘗祭に献上する新米を作るために選ばれた田んぼ「主基斎田：すきさいでん」が、ここ福岡市早良区脇山（当時は早良郡脇山村）であった。天皇一代に一度の貴重な大嘗祭への新米献上で、当時、脇山は蜂の巣をつついたような騒ぎになったという。福岡市の南西部に位置し、北は油山（標高597m）、南は背振山（標高1055m）に囲まれたこの山里は、盆地状の形状をしている事から昼夜の寒暖差が大きい。また背振山系から染み出す冷涼な地下水が美味しいおコメを作るのに適しているという。幾つもの候補地から、ここ脇山が選ばれたのは、そういった条件が整っていたからに違いない。

そして今から8年前、この地とは縁もゆかりもなかった一人の青年が、ここ脇山で有機無農薬栽培でのおコメ作りを始めた。ゆうきひろき（結城大樹）さん、30歳の時であった。

## 2018年10月8日
## 台風一過　稲刈り日和

9月中旬から始まった稲刈り作業。天候の巡り合わせもあり、我々編集チームとの撮影スケジュール調整が思うようにいかなかった。撮影日程はずれにずれ、10月に入り、第1週の週末3連休を残すのみとなった。

ところが、台風25号が福岡に接近すると言うニュースが流れ、週末に開催されるイベントの多くが早々に中止の決定を発表していた。そして、予報通り台風がやってきた。6日、7日と台風の影響で撮影は断念。撮影機会は最後の8日を残すのみとなり、この日を逃すと稲刈り作業が撮影できないかもしれない、という焦りの中、我々は最後のチャンスに賭けた。

10月8日の早朝、自宅のカーテンを開けた私の目には鮮やかなオレンジ色の朝日が飛び込んできた。私はいてもたってもいられなくなり、今回の主人公、ゆうきひろきさん（38歳）に連絡した。「今日、稲刈りやります！」と弾んだ声が返ってきた。朝日に一礼し、我々は脇山へと車を走らせた。

小一時間後、我々を迎えてくれたのは、黄金色に染まる稲穂の絨毯であった。それにしても、稲穂の色を「黄金色」にしてくれた田んぼの神様には感謝しかない。その黄金色の絨毯に陽光が降り注ぐ事によって、そのキラメキはさらに際立つ。約3000年前に大陸から朝鮮半島を経由して日本にもたらされたという稲作。その長きにわたり富や権力の象徴とされた黄金色の稲穂ではあるものの、その黄金色が満たしている豊かさは経済的な豊かさよりもむしろ、心の豊かさのような気がしてならない。毎年、新嘗祭で天皇が恵みに感謝する祭儀が連綿と行われている事からも、「今年も無事実りました」という心の安堵を感じるのである。

「今年も美味しいおコメができましたよ！」ゆうきさんは、いつものはにかんだ笑顔でコンバインに乗り込み、黄金色の絨毯の中に分け入っていった。

## ひろき少年の挫折

ゆうきひろきさん（ゆうきさんの要望で平仮名表記）は、ここ福岡市早良区脇山で2010年からおコメの有機無農薬栽培にチャレンジしている。生まれは北九州市小倉南区で、中2の時に隣の苅田町に引っ越した。小学校時代に書いた将来の夢は「超高層ビルの会社の社長になる事」といった大きな夢をもっていたという。高校に入学したゆうきさんは、3年間無遅刻無欠席を自らに課すほどの真面目な少年であった。ところが、その真面目な少年に、思いもよらぬ事件が起きた。

高2の夏、ゆうきさんは、ちょっとした好奇心から、これまで通っていた通学路とは違う通学路を選択し学校に向かった。ところが、この事が仇になってしまった。途中、道に迷い学校に遅刻。無遅刻無欠席が途切れてしまったのだ。「あの時は、ぷっつり切れましたね。もうおしまいだ、全部ダメだと思い込んでしまいました」。多くの人にとっては、人生を左右するほどの出来事ではないだろう。ところが、ゆうきさんにとっては無遅刻無欠席に相当なコミットをしていた事から、それ以降、高校に通う意義を見出せなかったという。勉強に身が入らなくなっただけではなく、学校も休みがちとなった。「今思うと、この出来事をきっかけに長い無気力期間が始まりましたね」と天井を見上げ、当時を述懐した。脇山でのおコメ作りに辿り着くまでの、凄まじい紆余曲折の始まりであった。

## ひろき青年のもがき

かろうじて3年で高校を卒業したものの、無気力な状態は続いていた。1年浪人して入学した法律系大学も1年で挫折。この後の2～3年はいわゆるニートと言われる状態だったという。「とにかく働きたくなかったですね。働くって事は苦で、生活の為にやりたくない事をやるって刷り込まれていたように思います。加えて、人との関わりも面倒でした」。このニート時代にゆうきさんは体重が100キロまで増えたという。と同時に遊びや飲食に使うための借金も200万近くに膨れ上がっていた。「さすがに、こりゃマズいと思いましたね。借金だけは返さないかんと思いました」。

働きたくはないが、働かざるを得ない状況になったゆうきさんは、ある自動車メーカーの期間工として半年間働いた。工場の生産ラインで何も考えず、ひたすら決められた定型作業に没頭した。工場と寮を往復するだけの生活を囚人のようだったと語るゆうきさん。その後も住宅設備メーカーでの期間工を経験。その甲斐あって、借金も完済し、体重も元の60キロに戻った。しかし、そこでの働く喜びや、やりがいは感じなかったという。「ただ、ライン作業が合っていたんでしょうね。人と関わる事も少なく、自分に合っていたんだと思います。苦ではなかったですね」。

ほんやりとではあるものの、自分に合う働き方を見つけたゆうきさんは24歳の時に、地元の苅田町に建設された自動車メーカーのエンジン工場に正社員として就職。ようやく社会人としての一歩を踏み出した。

## 生き方を考えた身内の死

正社員としての生活を始めたゆうきさんではあったが、何か特別に変わった事はなかったという。周囲は、安定した大企業に就職できた事を喜んでくれたものの、本人の中では「働く事が苦ではなかったが、何かが違う」と、もやもやしていたという。そんな時、生き方を根本から考えるきっかけとなったのが、弟さんの死であった。そして、その後3年ほどの間に叔父、祖父、母が相次いで他界した。「さすがに、これだけ多くの身内の死に接したら、自分は何の為に生きてるんやろうと真剣に考えるようになりました。少なくとも、この仕事の延長線上ではないなと思うようになりました」。

多くの人は20代半ばで、自分の生き方を真剣に考える機会はそれほど無いのではないか。しかし、死と接する事で否応なしにその機会は訪れる。ゆうきさんは、短期間で何度も何度も考えたに違いない。ただ、ではどうやって生きていくべきかに答えを出すには、考え続ける事に加えて、きっかけや出会い、縁といった、目に見えない力が必要になってくるものである。

ゆうきさんの場合のきっかけは、オーストラリアで働いていた友人から聞いた、食や農の裏側の話であった。食べ物が出来る過程で、どれだけの農薬や肥料が使われているのか？牛や鶏がどうやって育てられ、肉になっているのか？食材の日持ちを良くするためにどのような処理がなされているのか？「それまで食べ物なんて、腹にたまれば良いくらいの感覚でしかなかったですからね。友人の話は衝撃的でした」。

ゆうきさんは、この話をきっかけに、食や農に興味を持ち始めた。